K児が状況に応じた行動がとれるための指導

安住　順一

1　対象児について

生徒名　K・S（男）　昭和44年7月22日生（高等部1年生）

IQ 51（田中ビネー）　SQ 47　自閉的傾向

実態

（特性）自分から他人に話しかけることはほとんどなく、ひとりで本を読んだり、音楽を聞くことを好む。（長所）おだやかであり、他人と争うことはほとんどない。難しい漢字をよく知っており、事実を羅列した文章が書ける。器用であり、要領のわかった活動は上手にこなす。（問題点）他の生徒が次の行動に移っているのに、ひとりだけじっとしたままでいることが多い。人の言葉を聞いていなくて活動ができなかったり、的はずれの応答をすることが多い。加減がわからずにいつまでもその行動をしていることがある。気に入らないことがあると自傷行為（頭をたたく）をしたり、床に物をなげたりすることがある。

2　個人目標の設定と指導仮説

(1)　個人目標の設定

K・S児の実態から、学校での集団生活により適応していくために、「状況を理解し、自主的に行動する」という目標を設定した。そして、この目標を達成させるために、作業学習（印刷）、日常生活指導を通して取り組んだ。

(2)　指導仮説

実態
① 自主的に動けない
② 人の言葉に反応しない
③ 気に入らないことがあるとパニックをおこす

↑

原因
① すべきことがわからない
② 言葉を聴いていない（他のことを考えている）
③ 正しいと思っていたことがまちがっていて注意される

→

指導方針
① 授業の展開をパターン化する
② 教師との応答の回数をふやす（自分の世界にとじこもっている時間を短くする）
③ 適切な課題を与える

↑

④ 強化（ほめる）

→

効果
① すべきことがわかり自主的に行動する
② 言葉を聴きとり的確な行動をする（自分の世界にとじこもらない）

3　指導の実際（作業学習）

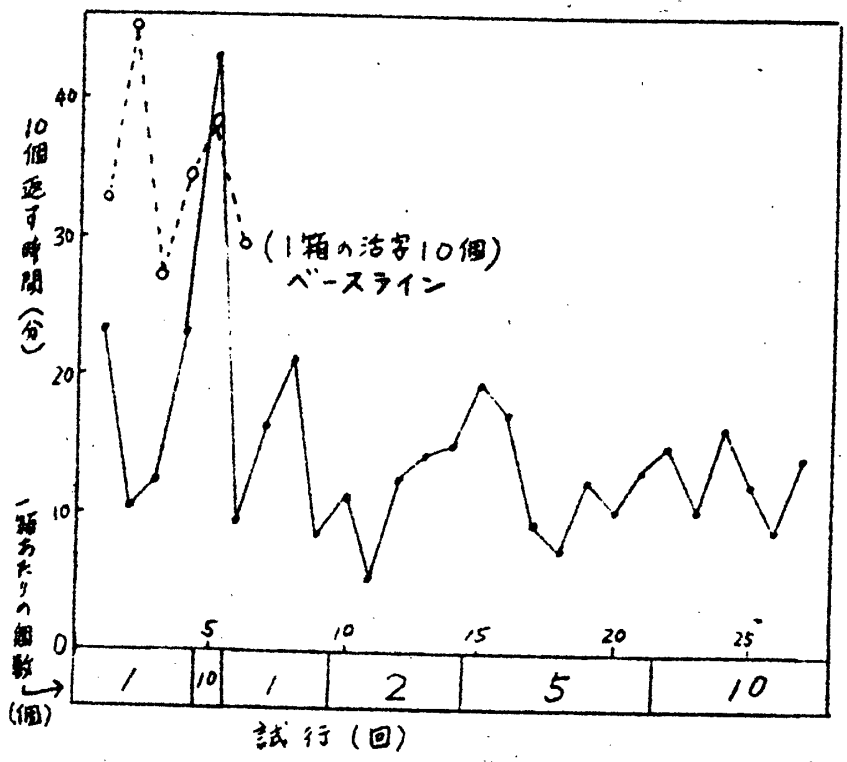
作業学習（印刷コース）における実践を次に述べる。作業学習における指導方針は、①授業の展開をパターン化することにより見通しをもって自主的に行動できるようにする。②一作業の量をできるだけ少なくすることにより、教師との応答の回数を多くする。③課題を適切に与えてやり通させ自信をもたせる。（漢字に興味があることから「活字の返し」作業の係にした。）④頻繁にほめることにより、意欲をもって作業ができるようにする。以上4点である。

(1)　授業の展開

学習過程	K児の行動（5月）	手だて	K児の行動（10月）
1 あいさつをして入室する 2. 作業日誌を書く (1) 日付・作業時間 (2) 作業内容 (3) 今日の目標	1 教師が「失礼しますは？」と問いかけるとあいさつができる 2. 印刷室に入ってきても立ったままで、日誌を書こうとしない ・一項目を書き終えるとじっとしたままのことが99%	・毎回同じことのくり返しなのでパターン化して覚えさせる 〔入室→日誌に日付・作業時間を書く→今日の作業内容を聞く→今日の目標をたてる〕 ・活字の返しを毎回させることにより「何箱返せそうだ」という見通しを持たせる	1. 教師と目があうと「失礼します」とあいさつをして入室する 2. 入室するとすぐに作業日誌をとりにゆき、日付と作業時間を書く ↓ 「今日は何をしましょう」と質問する ↓ 「何箱返す」と自主的に目標をたてる
3. 活字の返しをする (1) わからないことは質問する (2) 一作業が終わったら報告する	(1) 教師がそばについていると質問は比較的できるが、離れていると、質問しないで何十分間も立ったままのことがある (2) 一作業が終わったのに報告しないでぶらぶらしていることが99%	(1) そばについていて声かけをする→顔を見て質問を促す→そばにいるだけ→離れて見ているというステップで質問させる。 (2) 一作業の量を少なくして報告回数をふやす	(1) わからないのにボーッと立っていることがほとんどなくなり、教師が離れていても質問できだした (2) 作業が終わると、教師が離れた場所にいても報告できだした
4. 後始末・掃除をする 5. 日誌をかく 6. あいさつをして退室する	4 班長の後始末をするようにという呼びかけに反応しないで、作業を続けていることが99% ・掃除は熱心にとりくむ 5 作業内容がまちがっていることがある 6 何も言わずに退室することが99%	4. 反応がない時は、直接名前を言って呼びかけてもらう 5. 成否のわかりやすい目標をたて、それが達成できたかどうかの反省を書かせる 6. 名前を呼びかける→顔を見る	4. 班長の後始末にかかるようにという呼びかけにすぐに答えて後始末にかかる 5. 今日の目標が達成できたかどうかを書くようになった 6 自主的にあいさつをして退室できだした

(2) 活字の返し作業に集中してとりくむための指導

（活字返し作業の実態）1箱に活字を10個入れてそれを全部返したら作業終了の報告をするようにしていた。(図 o----o) 活字10個を返す時間は平均すると34分42秒である。これを詳しく観察すると、返す場所がわかっている活字を1個返す時間は1分から2分であるが、わからない活字があると、教師が声をかけるまで質問しないで10分でも20分でもボーッと立ったままでいることがわかった。（ねらい）そこで、一作業の量を少なくして、作業終了の報告をする回数をふやすことにより、教師との応答の回数をふやし、ボーッとしている時間を少なくし、作業に集中してとりくめるようにする。また活字を返す時間をはかり、速く返せたらほめることにより、課題が成就できた満足感を多く味わせようと考えた。（方法）活字を1箱（1個）返したら教師に作業終了の報告をし、次の活字を返す。徐々に一箱あたりの活字の数をふやす。（1個→2個→5個→10個）（結果）活字10個を返す時間の平均は13分32秒になった。わからない活字はすぐに質問できるようになった。5試行目に一箱の活字を1個から10個とふやしたが、極端に返すスピードがおそくなった。（わからない活字の質問ができなかったためである。）



(3) 考察

①授業の展開が毎回同じであることから、流れをつかみ、教師に指示されなくても自主的に活動ができるようになった。②

自分の世界にとじこもってボーッとしている時間をなくすために教師が注意したり、指示をするのではなく、K児からはたらきかける（質問する、作業終了の報告をする）場面を多く設定した方法は有効であった。③④短時間で達成できる課題が与えられ、本人なりにできたという自信がもて、さらにそれに対して強化が与えられる（ほめられる）という一連の流れの中でこの作業に対する意欲がますますでてきたものと思われる。しかし、まだ長時間作業を集中してするという態度は身についておらず、今後の課題である。

4. まとめ

3で述べたように、作業学習においては、「状況を理解し、自主的に行動する」ことがほぼできだした。

日常生活においても、現在では、朝と帰りのあいさつが自主的にできるようになり、先生や友だちの話すことをよく聞いていて的確な言動がとれることが多くなってきた。また、教科ごとの教室移動の際、4月当初はいすにすわったままいつまでも動かずにいることが多かったのであるが、現在では友だちの動きに合わせて、自主的に動けるようになってきている。

パニックをおこすことが最近ではほとんどなく、おだやかな顔で、安定した生活をしているのは、やるべきことがわかって、自信のもてる行動が多くなったことと、それに伴い、ほめられることが多くなり、注意されたり、友だちに笑われたりということが少なくなったためと考えられる。今後も、このような成功経験を数多く与えることが必要と思われる。

10月の職場実習の際にわかった問題点として、他人のものを勝手に使ったり食べたりする、根気よく仕事ができない、勝手に仕事場を離れるといった身勝手な行動が目立つことがわかった。これらのことは、現在でも、学校生活の中で時おり見られることである。今後は、この方面での指導にも力を入れていく必要がある。